

エコミュージアムの形成過程と開設の手順

福留 強

1. 問題の所在と研究目的

(1) 研究の背景・問題の所在

これまで筆者は、地域活性化において、「生涯学習まちづくり」が成果をあげることについて研究し、推進してきた。中でも地域資源を生かしたまちづくりは、生涯学習まちづくりの基本に位置づくものである。また、「エコミュージアム」は、地域資源を活用することが基本であることから、今日的なまちづくり課題として「生涯学習まちづくり・観光まちづくり」と共通点が多いと考えられる。

これまで、エコミュージアムは、「観光まちづくり」の視点では、あまり積極的な議論にはならなかったことから、行政関係者には理解されていなかった傾向がある。

「市民が主役のまちづくり」の活動と、観光としての取組みが、具体的に重複しており、「エコミュージアム」は、観光のまちづくりとその手法が合致すると考えられる¹⁾。そのため、エコミュージアムに取り組む地域は少なくないが、具体的な取組みについては確立したものはないため、成功している例は少ない。

(2) 本研究の目的と方法

この研究は、まちづくりとしてのエコミュージアムの形成過程を研究し、今後の、効果的な手法を検証しようとするものである。そのため具体的には、次のことを明らかにする。

①エコミュージアムの意義を明らかにするとともに、「エコミュージアムの機能」は、まちづくりと市民活動として実践する側面とに合致していることを明らかにする。

②エコミュージアムの実施自治体等は、いかなる手続き、事業を行ったのか。その結果、より成功した事例は、実施にいたる場面で、多面的な行動が効果をあげている。そこで、エコミュージアムの形成過程を検討することによって、いかなる手法を駆使すればよいか、いかなる市民の関わり方をすれば良いかについて考察する。

研究方法としては、文献調査をもとに、成功している事

例、不振に陥った事例を大まかに分けて、エコミュージアムの形成過程を比較検討するとともに、その実施内容を比較し、効果があると思われる実施項目について検討する。

2. エコミュージアムの意義・概要

(1) エコミュージアムの意義

①エコミュージアムとは

エコミュージアムは、エコロジーとミュージアムとの合成語である。従来のミュージアムが一つの建物の中で完結するのに対して、一定の地域（エリア）に残る様々な遺産（自然、歴史、文化、産業）を現地で整備保存し、全体をミュージアムとして捉える考えがエコミュージアムである²⁾。

日本では、人間の生活環境について探求するという意味で、「生活・環境博物館」とも表現されている。

②エコミュージアムの目的と機能

エコミュージアムの目的は、学術、文化、教育を手段としてその地域社会の発展・振興に大きく寄与することである。行政と住民の力を合わせ、ミュージアムをつくり、運営しようという考えを理念に据え、行政は資金や情報及び専門家を集め、住民は知恵やアイデアを出し合っ、一体となって運営していくことが前提となっている。

エコミュージアムは、知識の活用に重点を置く「研究機能」、地域の人材を養成し、地域の仕事や産業の生産成果をあげるための「学習機能」、現地において保存し活用して、その価値を広く伝えていくための「保存機能」という三つの機能を有している。

1) 福留強 「観光まちづくりの手法と地域活性化への効果」

聖徳大学生涯学習研究所紀要第9号 2011年 pp.19～28

2) エコミュージアムの考え方は、世界のミュージアムをリードする国際博物館会議の初代会長としてミュージアムを指導していたジョルジュ・アンリ・リヴィエール (Georges Henri Riviere) らによって広められた。(「ECOMUSEAM」丹青総合研究所 1993年)

(2) エコミュージアムの構造

建物施設に収集品を集め、展示・公開されている従来の博物館に対して、エコミュージアムは、一つの建物ではなく、地域一定の領域範囲(テリトリー)に拡大している。そして、収集品にあたるものが、ある一定の地域に分散した遺産や資源になっている。住民は、利用者であり、参加者であり、博物館職員であるということが出来る。エコミュージアムは、基本的に次の4つの要素から成り立っている。

①テリトリーの設定

エコミュージアムでは、その領域は、一市町村の中にあるもの、市町村にまたがるものなど多様で、「生活圏、文化圏」で捉えて設定することが多い。わが国の場合、市町村単位が最大規模であり一般的には限られた地域に設置されている場合が多い。

②コアミュージアム

その領域の中に本部的機能の役割を果たすコアミュージアムがおかれる。ここには研究室、図書室、展示室などがあり、エコミュージアム全体の総合案内センターとして事業の企画や全体の運営を行う。

③サテライト

サテライトの対象は、歴史的な街並み、史跡、考古遺跡などのほか、目には見えない風俗、習慣、伝統などの文化遺産である。特に、庶民の歴史の中での様々な記憶や知恵、エピソードや言い伝えもエコミュージアムの遺産の対象となる。

また産業遺産や自然遺産も含まれ、それらは、1ヶ所収集ではなく現地保存が原則である。

④ディスカバリー・トレイル(発見の小径)

地域に点在するサテライトを見学するコースは、「ディスカバリー・トレイル(発見の小径)」と呼ばれ、これは観光資源・観光スポットとも共通している³⁾。

(3) エコミュージアムの特色

①観光政策としてのエコミュージアム

エコミュージアムは歴史・文化・自然・産業遺産を探求することが基本にある。そのため地域のアイデンティティーを浮き彫りにすることが主な活動となる。わが国では、観光政策としてエコミュージアムを実施する例が一般的である。

②今日的な観光の動向に合致する

従来の周遊型観光に代わり、地域の自然や文化に接したり、参加体験する観光プログラムへの要求が高まっている。また、マス・ツーリズムに加えて、産業ツーリズムなど、目的の明確な個性的なツーリズムが増えている。観光地づくりは、地域の個性(文化)を磨きアピールすることであり、その点でエコミュージアムの目的、受け入れ態勢に合致する。

③人がもてなし展示がもてなし

エコミュージアムと観光との視点で重要なのは、ホストである地域住民が地域の文化を十分に熟知し、もてなしができることである。特に、地域ぐるみの「ホスピタリティ」や「もてなしの心」は、エコミュージアムにとっても重要な要素である。

④自然にあるべきところにあるがままに

ただ単に陳列ケースに資料を並べるだけでなく、開いて見せるのが展示である。また自然にあるべきところにあるがままに存在するものを見せるということが、エコミュージアムである。いわばこれは、「まち全体が展示室、博物館」であるということである。

⑤環境デザインは、まちづくりそのもの

展示の範疇である環境デザインとして、例えば、車道・歩道・バスストップなどの「交通系デザイン」、サイン・電話ボックス・交通標識などの「情報系デザイン」、街路灯や植え込み照明・演出照明などの「照明系デザイン」、モニュメントやオブジェ・植栽などの「美観演出系デザイン」もエコミュージアムの一部となる。これは、まさに、まちづくりそのものであるといえる。

(4) サテライト設定の活動 地域の「光」に関わる様々な学習

観光は「国の光を心をこめてみせる、誇らしく示すこと」といわれ、地域の光を誇らしく示すとともに、日常生活を誇らしく示すことでもある。観光の学習活動とエコミュージアムにおける活動を対比させてみると、コアミュージアム、サテライトづくりの作業と同一であるということが出来る(表1)。

観光にかかる場面は広く、市民が、地域の資源を「探す」「調べる」「推理する」「整理する」「創造する」などの、多様な活動が不可欠である。したがって観光への取組み、「地域の光」に関わり方は、誰でも関われるものであることを認識することが必要である⁴⁾。

(5) 日本におけるエコミュージアムと類似施設

1993年(平成5年)、山形県朝日町を1号として全国にいくつかのエコミュージアムの形が見られるようになった。当時、これらを分類して次のような試みがされている。

①エコミュージアムの理念に基づき設置されたもの・・・三陸町、東和町、朝日町など

3) 里見親幸 『ECOMUSEAM』 丹青総合研究所 2000年

4) 福留強 『もてなしの習慣～みんなで観光まちづくり』 悠雲舎 2011年

表1 サテライト設定の学習都観光の学習活動

観光学習の手順	観光の学習活動	コアミュージアム、サテライトづくりの活動内容
① 探す	観光資源を探す	地域資源を発見する
② 調べる	地域資源を調べる	地域資源について解説できるように調べる
③ 推理する	資源について過去、未来を推理する	地域資源について解説し、その成り立ち等を推理する
④ 整理する	資源を整理し、新しい側面を発見する	展示（表示）可能にする資源資料の共通性を整理する
⑤ 創造する	地域資源について解説地域の宝を創造する	独自の展示物など、コアミュージアムやサテライトの魅力づくりを行う

- ②エコミュージアムの構想を前進させている例・・・日高市、大滝村、白桦市など
 - ③エコミュージアムに関心、興味を寄せている例・・・白老町、徳島県3町合同など
 - ④エコミュージアムの理念に共通の構想で推進する例・・・大津市、大方町など
 - ⑤自然遺産の現地保存・活用型博物館（フィールドミュージアム）・・・西川町、大町市など
 - ⑥遺跡・史跡資料現地保存形野外博物館・・・富岡市、穴水町、吉田村など
 - ⑦街並み、ミニ博物館ネットワーク・・・墨田区、須坂市、利賀村など
 - ⑧生涯学習、環境づくり（生涯学習まちづくり）・・・湯布院町、綾町、足助町など
- 現在これらに近い活動をしているものを含めると100箇所程度になっている⁵⁾。

2. 事例 エコミュージアムの事例から

わが国において、比較的的成功していると思われる事例と、実現に至らぬまま中止したか、活動があまり進展せず不振になっている事例について、手元の資料から20事例を抽出して比較検討を試みた。対象は、前述のような「エコミュージアム」と名乗っていないくても、手法として「エコミュージアム」を駆使している場合も含む。

特に、山形県朝日町を代表的な事例として、設立から構成までの手順を中心に述べる。さらに、エコミュージアムを意識して施策を講じたにもかかわらず、十分に効果をあげていないといわれる、いわば失敗したと思われる事例を、対比させて考察してみる。また、他の事例にしても取り組まれた手順を検討したが、ここでは、それらの概要のみ数例を挙げておく。参考に、筆者が訪問したフランスの2つのエコミュージアムについても概要を参考にした。

事例1 山形県 朝日町エコミュージアム

(1)朝日町の概要

朝日町は、山形県の中央部に位置し、人口8,900人の中山間地区で、全国初のエコミュージアムに取り組み、現在も活動を続けている。1988年、町営の朝日山麓家族旅行村「朝日自然館」が建設され、夏の自然を体験するキャンプ場やコテージ村、冬はスキー場として、多くの人々を朝日町に呼び込んでいた。

①総合開発基本構想とエコミュージアム

まちづくりを、町行政だけに任せるのではなく、町民自らも関わる参画意識と機運が盛り上がったのである。

例えば豊かな自然と空気に感謝するモニュメントとして世界でも類をみない「空気神社」が市民により建設された。この建設に呼応するように、朝日町は「地球に優しい町宣言」を行い、自然環境を大切にしていくなちづくりを目指すことになった。また、全国に先駆けて「空気の日」を国連環境デーの6月5日にすることを決め、毎年この日に空気に感謝する催しを行っている。

こうした動きの中で、エコミュージアムの考え方が町の総合開発基本構想に取り入れられたのである。

②朝日町独自のエコミュージアム基本構想

朝日町では、このエコミュージアムの考え方を取り入れて、「第三次総合開発基本構想」を作成した。その中では「わが町に住む人々が、それぞれがこの町の文化、自然、生活に誇りを持ち、活かしながら、楽しく活き活きと暮らせる生活スタイルの確立を目指す」と述べられている。さらに1991年に朝日町独自のエコミュージアム基本構想をまとめ、「エコミュージアムは、朝日町民にとって見学者であると同時に出演者であり、町はまるごと博物館になり、住

5)「ECOMUSEUM～エコミュージアムの理念と海外事例報告～」
丹青研究所 1993年 pp.107～110

民は誰でも学芸員になる」としている。町を良く知り、そのことにより、町民が誇りを持って生活できる町づくりを提案している。そのため、具体的に町の自然、文化、産業、各々の遺産の中から、大切なものを選び、サテライト「現地見学場所」として取り上げている。

(2)朝日町エコミュージアムのあゆみ

朝日町エコミュージアムのあゆみは、次の通りである(表2)。

(3)主な活動と手順

平成3年以降、様々なイベントが開催されている。いずれも、NPO 法人朝日町エコミュージアム協会の活動の一環と

なっており、このエコミュージアムが民間の活動になっていることがわかる。それは、エコミュージアムが「ハード」ではなくて「ソフト」であることを示している。さて、これらの経過を整理すると、次のような手順で行われている。

- ①準備会の基礎的な活動
- ②関係者を集めて研究会を実施。この研究会が構想委員会
- ③運営のための組織に発展
- ④エコミュージアムコアセンターの設置
- ⑤町民が学習する機会を設定(朝日町の暮らしと文化、町内めぐり)
- ⑥記念イベントなどで、内外に設立をアピール
- ⑦対外的な研修の場に積極的に参加する(エコミュージアム・シンポジウムなど)

表2 「朝日町エコミュージアム研究会～NPO 法人朝日町エコミュージアム協会の活動」

平成元年	10月	第1回研究会設立準備会議 第1回研究会例会
平成2年	1月 5月 10月	第3回研究会 エコミュージアム研修会(講師 新井重三教授) 第6回研究会例会(基本構想委員会として活動を開始) 朝日町の暮らしと文化 町内めぐり(中央公民館との共催)
平成3年	3月 10月 11月	エコミュージアム・シンポジウム開催(地域開発研究会主催) エコミュージアム基本構想調査報告書報告会 第20回研究会例会(フランス視察研修報告会)
平成4年	3月 6月	第1回エコミュージアム・フォーラム(都道府県会館) 国際エコミュージアムシンポジウムの開催(朝日町)
平成8年	11月	旧石器発見60周年記念シンポジウム
平成11年	1月 8月 12月	第1回朝日町の宝物カルタ大会 エコミュージアム・ガイド(まちの案内人)の会設立 NPO 法人朝日町エコミュージアム協会発足
平成12年	6月 12月	エコミュージアムコアセンター「創遊館」開館 (NPO 協会でエコルーム・コーナーの管理運営を受託) ワインシンポジウム開催
平成13年	6月 8月 11月	第1回水とくらしの探検隊 「山形県朝日町のエコミュージアム」VTR制作 リンゴシンポジウム開催
平成14年	1月	「あさひまち宝探し」キャンペーン 750点の応募 第1回あさひまちの宝展
平成15年	6月～	「エコミュージアム宝紀行」(見学会)キャンペーン全10回
平成16年	12月	かみごう宝さがし展開催
平成17年	12月	エコミュージアムカルタのリニューアル
平成18年	7月～ 11月	最上川学～おらほの五百川峡谷～ 連続講座 五百川峡谷シンポジウム開催
平成20年	10月	最上川・五百川峡谷シンポジウム開催(白鷹・朝日・大江)

⑧キャンペーンやシンポジウムなど、積極的な地域への働きかけ

⑨エコミュージアム・ガイド（まちの案内人）の会設立

これらの手順は、エコミュージアムに対する人々の、意識、構想、組織、研修と啓発、コア設立、活動の展開、人的体制の拡充等が具体的に進められ、手順化していることが理解できる^{6) 7)}。

事例 2 千葉県 房総横断鉄道沿線エコミュージアム環境整備

(1) 活動地域の概要

房総横断鉄道は、私鉄小湊鉄道と、第3セクターが経営するいすみ鉄道の67kmからなる千葉県房総半島の内房と外房をつなぐ鉄道で、域内の公共交通である。しかし、現在では通勤通学の減少等により経営も苦しく、いすみ鉄道は存続が危ぶまれている。そのためには、話題づくりをして観光客を呼び込むほか、住民自身も地域鉄道に関心を持ち、地域再生に努めることが重要となる。

(2) 「房総横断鉄道沿線エコミュージアム環境整備」の実施

そこで、地域の経済活動の一環として「房総横断鉄道沿線エコミュージアム環境整備」を実施している。地域の活性化、経済的な元気力、産業誘致・開発、定住などを図るためには、地域力アップ、歴史・文化、自然等の地域資源を生かして集客し、かつ満足感を与え創ることが必要とされている。そのため、例えば、平成20年度は、「歴史等調査」、「鉄道施設デザインコンセプトづくり」、「エコミュージアムのための環境整備」、「広報イベント」などを続けている。

(3) 平成21年度以降の諸活動

- ①エコミュージアム・キュレーター、コンシェルジュ、ガイドの養成と実践、発信
- ②「地域を活かすエコミュージアム」のフォーラムの実施
- ③エコミュージアムを理解するフォーラムを地元で開催
- ④Win-Win観光の具現化と発信として、いすみ鉄道支援のための特産品で地酒「鉄の道」がリリースされた。
- ⑤エコミュージアム・アクセスモビリティの確保が実施された。特に、電気自動車の試乗会を社会実験として実施するなど、オープンセレモニーを通じて官民、住民の連携を深めた⁸⁾。

事例 3 岩手県 三陸町まるごと博物館

筆者は、かつて三陸町まるごと博物館の組織の発足に関わった経験がある。この事業はやがて終了し、合併により消滅した。さらに平成23年3月11日の大震災によりまち

の大半は津波に消えた。しかしながら、その形成過程を記録でたどってみると、次のような点で活動手順が記録されている。

- ①エコミュージアムについての学習
- ②まちの基本構想の作成
- ③外部の指導者を導入
- ④地域資源の発見に関する取組み（サテライト）
- ⑤住民ボランティアの養成200人
- ⑥各分野における学習と実践
- ⑦案内表示板等の設置（ディスカバリー・トレイル）
- ⑧住民の啓発・大会の実施 丸ごと博物館シンポジウムの開催
- ⑨エコミュージアムの開設

当初、これらの事業は、エコミュージアムの手法というよりも過疎地の活性化の手法としてスタートしたが、結果的には、基本的な手法に則していたものと思われる⁹⁾。

事例 4 神奈川県相模原市 城山エコミュージアム

城山エコミュージアムの場合は、生涯学習課（城山教育班）に事務局を置く。事業として「城山エコミュージアム推進事業」を推進している。これは、公募によって「エコミュージアムを育てる会」を設置して各部ごとに活動しているものである。部会には、「ツアー部会」「昔の写真部会」「古道部会」「道標部会」「通信部会」「城山エコミュージアム通信」の発行などがあり、いわゆる社会教育活動としての展開が見られる。これまでの歩みは次の通りである。

- 平成13年度 基礎調査の実施
- 平成14年度 基本構想・計画等の策定
- 平成15年度 ワークショップの開催、エコミュージアムツアーの開催
- 平成16年度 リーフレットの作成、説明板の設置
- 平成17年度 推進協議会の設置、昔の写真の収集及び展示
- 平成19年度 相模原市と城山町の合併 旧町のエコミュージアムを継承（エコミュージアムツアーやシンポジウムの開催、推進協議など）
- 平成20年度 ツアーガイドブックの発行、昔の地図大山みちの作成

6) 安藤竜二 「20年目の朝日町エコミュージアム～成長と仕組み」 東北例会 in 朝日町資料 2011年

7) 小松光一『エコミュージアム～21世紀の地域おこし』 家の光協会 1999年 pp.65～91

8) 房総横断鉄道沿線エコミュージアム推進協議会資料 2011年

9) 福留強・全国生涯学習まちづくり研究会編著 『まちを創るリーダーたちⅡ～生涯学習のまちを訪ねて』 学文社 p134

平成 21 年度 ワークショップ5つの部会を設置 育てる会のメンバーの活躍

平成 22 年度 昔の写真展, 同講演会の開催, エコミュージアム通信の発行, HP 掲載

この場合, コアミュージアムについては, エリアや活動が目立ったものは見られない。しかし市民の中にリーダーが育ちつつある。町村合併により, それまでの活動に停滞が生じたのは, 行政の理解が不十分であったからである¹⁰⁾。

ジウム推進委員会を発足させた(平成 14 年 7 月, NPO 法人に改組)。さらに「せせらぎ館運営委員会」が発足し, 活動拠点「二ヶ瀬せせらぎ館」が平成 11 年 4 月に開館した。ここでは, 「市民活動を支援機能」, 「情報の受発信機能」, 「活動成果展示機能」の 3 機能を果たしている。これは, 国土交通省関東地方整備局が堰管理所を川崎市が借り受け, プランの運営事務局として開館したもので, その後の活動の中心になっている¹¹⁾。

事例 5 神奈川県川崎市 多摩川エコミュージアム

「多摩川エコミュージアムプラン」は, 多摩川と密接に関連を持つ「水循環」, 水源涵養に必要な「緑」, 地域が育んだ「歴史と文化」, それを支える人々などの資源を活かし, 市民が地域の環境や歴史を考え, 市民自らが望ましい環境を創り上げることを目指そうとするものである。

平成 9 年, 多摩川エコミュージアム構想後, 平成 13 年, 多摩川エコミュージアムプランにより, 多摩川エコミュージアム推進委員会を発足させた(平成 14 年 7 月, NPO 法人に改組)。

事例 6 福島県 三島町エコミュージアムプロジェクト

福島県三島町では教育委員会内に, 三島町エコミュージアムプロジェクト事務局が置かれている。ここでは, 「奥会津案内人講座」を三島生涯学習センターで開催するほか, エコツーリズムや「環境教育を学ぶ会」などが開催されている。各事業は, 教育委員会を実施しているだけに, 環境教育, 人材育成に重点が置かれている。これまでの事業は次の通りである(表 3)。

表 3 三島町エコミュージアムプロジェクトのこれまでの事業

地域資源の再発見事業ワークショップ	三島町の大谷地区で「ふだん着の暮らしを語ってみんべ」をテーマに大谷地区のあれこれを調査。(18.11 ~ 19.3 福島県地域づくり総合支援事業)
「奥会津案内人」講座 2007	都市と農村を結ぶコーディネーター人材育成の第 1 期生 8 名を迎え入れ (19.8 ~ 20.1 福島県地域づくり総合支援事業)
奥会津人材育成ネットワーク集会 (東北環境教育ネットワーク)	奥会津の地域活性化にエコツーリズムや環境教育などの考え方を学ぶ 3 日間。奥会津に新しいネットワークがたくさん生まれた。(19.11.23 ~ 25 電源立地対策交付金事業)
まちづくり元気塾	東北電力の「まちづくり元気塾」の助成を受け, 作新学院大学の橋立達夫教授をチーフパートナーとして 3 回の講師を派遣
箱膳ネットワーク	山梨県の NPO えがおつなげてとの共同事業を実施。三島の桐で作られた箱膳と三島の食材を活かした料理で食育についての事業を実施
JOYCE!	「まちづくり元気塾」をきっかけに「食」をテーマに活動する女性グループの活動
おおたにワーキングホリデー	三島町大谷地区では農業に触れてみたい, 農村の暮らしを体験したいと思う方の受け入れ

■海外の事例

フランスはエコミュージアム発祥の地である。その中で比較的広く知られる 2 つのエコミュージアムを訪ねてみた。わが国と, 規模においても内容においても大差はないというのが率直な感想である。ただ, 地域では推進するボランティアの活動が目立っていたように思われる。また, 官民共同に設置したといっても, 実態はほぼ民間で運営しているという感じである。説明の中には, 設立までの手順が語られたが, その内容は, 本論に述べた手順とほぼ一致しているといえる。

事例 7 クルゾー・モンソ・レミーヌ・エコミュゼ

パリから TGV で約 1 時間半にクルゾーがある。クルゾー・モンソ・レミーヌ・エコミュゼは, パリとリヨンの間に位置するクルゾー・モンソ都市共同体のエコミュージアムである。1972 年に産業の博物館を設置し, これが 1974 年エコミュゼとして位置づけられたものである。産

10)「城山エコミュージアム通信」第 9 号 2011 年 9 月

11) NPO 法人多摩川エコミュージアム推進委員会資料 2011 年

業革命以降、鉄鋼業の町クルゾー、石炭産業の町モンソ、レ・ミーヌという3つの町の住民が核となり、地域の工業遺産を保存し、未来につなげていこうと周辺の16のコミューン（市町村）が連合して作られたのである。このエコミュゼの運営組織としては、「学術委員会」「利用者委員会」「管理委員会」で運営されており、住民、コミューン、エコミュゼの専門家が民主的に関わっている。このエコミュージアムは、農村型ではなくて都市型の新しいモデルを提案したことで、「クルゾーの冒険」と呼ばれ、世界的に評判を呼んだという。1985年地域の経済的な崩壊で停滞して、7年後に再生したが、行政とは距離を置いているようになっている。

事例8 フルミ・トレロン・エコミュゼ

フルミ・トレロン・エコミュゼは、パリ北方、ベルギーとの国境近く、ノール地方フルミ町とトレロン地域にある。1969年エコミュゼとして整備され、1978年には、地域全体の小学校と教育プロジェクト契約している。特に「フルミ地方の100年の社会経済生活」を子どもに調べさせるなどの活動や、さらに高齢者のアソシエーションが思い出を収集する活動などのユニークな活動が目立った。1980年には「織物と社会生活博物館」を設立して、いわばコアミュージアムが誕生した。また、ボランティアネットワークが形成され、正式にエコミュゼとして活動を開始した。また1982年には、学術委員会が生まれ、大学研究機関との連携が生まれる。以後、トレロンの「ガラス工芸博物館」「ボランティアカーズの館」「宗教遺産センター」「ボカージュの館」などの施設が続々と生まれている。

整備された遺産群は、子どもたちが校外学習に訪れており、訪問したときも30名程度の子どもたちが教師に引率され、学習している様子を見ることができたのが印象的であった¹²⁾。

3. 事例・エコミュージアムの設立とその活動

ここに紹介した事例を含む14のエコミュージアムの事例を、調査資料の中から分析してみた。表4は、そのうちの特徴が明確なものうち、活発に推移したと思われるものの6例（海外を含む）と、新しいものや知名度が低くエコミュージアムの運営としては効果をあげていないと思われるもので、成功例と対照しやすいもの8例を比較したものである。実施団体のPRについてマイナスイメージをもたれないようにするために仮名のアルファベット（A～H）に置き換えて表記している。

なお、ここで「活発」とは、例えば「イベント等が切れ

目なく行われていること」、「行政等の部署が、継続的に活発に活動していると思われること」、「広くエコミュージアムとして知られていること」などを観点とした。

本論では、各事例を詳細に記述していないが、手元の資料や、筆者が直接関わった事例、調査した時点を参考にしてみてもとめてみると、その特色が比較的明確に見えるようである。

(1) エコミュージアムの手順で重点が置かれている場面

各エコミュージアムについて、どの部分に重点を置いたかについて資料及び聞き取り等をもとに3段階に表してみた。表中の印は次のことを表している

●特に重点化して実施している

◎比較的すぐれている

○実施しているが不十分に分類

・空欄は、活動が不明確であるか、実施していないと思われる項目

- A 現在では、エコミュージアムの思想はないが、特色ある地域づくりで発展している
- B エコミュージアムセンター。自然と共存できるまちづくりが目標。ミヤタナゴの保存
- C 環境講座ルーム、エコミュージアムセンター
- D エコミュージアムセンター 自然史博物館
- E フィールドミュージアム構想を立案したが首長交代で、計画は中止
- F 行政の学習不足で、計画の段階から行政が撤退
- G エコツーリズム、環境教育を学ぶ。まちづくり元気塾
- H 行政の学習不足で、計画の段階から行政が撤退。環境団体、市民の反対運動で消滅

(2) 考察 エコミュージアムの進め方について～構想から完成まで～

代表的なエコミュージアムの事例とはいえ、それらの各々の特色を検討し、分析することで、いくつかの特徴を把握することができる。

①共通するもの活動内容

- ・まちの基本構想の作成（行政の対応）
- ・実施に向けて準備会を開催する
- ・コアミュージアム等の中心施設を設置する
- ・ディスカバリー・トレイル、案内標識等が整備されている

②活性化した事例にみられる顕著な活動内容

いうまでもなく、平均的に満遍なく実施されており、次

12) 里見親幸 「ミュージアム・ナウ」 週刊教育資料 no.985 2007年

表 4 エコミュージアムの手順で重点が置かれている場面についての比較

実施された活動	クルゾー・モン・レミーヌ	フルミ・トレロン	朝日町	川崎市多摩川	相模原市城山	房総横断	A	B	C	D	E	F	G	H
エコミュージアムについての学習	◎	◎	●	○	○	●	◎				◎	●	○	○
まちの基本構想の作成（行政の対応）	◎	◎	●	●	●			○			●	●	○	○
実施に向けて準備会の開催	●	●	●	●	●	●	◎				◎	◎		
エコミュージアムの推進本部等設置		◎	◎	●	◎	◎					●		○	○
エコミュージアムについて住民の学習会の開催			●	○	●	◎			○		◎			
住民ボランティアの養成	●	●	●	◎	●						●		●	
住民への広報、情報提供の徹底			●	●	●	◎			○			◎		
必要な予算等の計上			◎		○	◎				◎	◎	○		
コアミュージアム等の中心施設を設置	●	●	●	●		●	◎	◎		●	◎			●
行政の関連施設との連携			●	●		◎	●	○			◎	◎	●	
地域資源の発見に関する取組み			◎	◎	●	●	◎			○	◎			
各分野における学習と実践			◎	○	◎	◎	◎				◎	○		
案内表示板等の設置（ディスカバリー・トレイル）	●	●	●		●	◎	◎			●	●	●		
住民の啓発・大会の実施			●	●	●	◎	◎					●		
エコミュージアムの開設	●	●	●	○	○	◎						◎		

のような特徴が見られる。

- ・表中、ほぼ全ての領域の活動を経験している
 - ・準備組織の発足から着実に発展させている
 - ・コア施設が整備され、着実な事業が展開され継続している。
 - ・ボランティアを養成し、各種のイベントを実施し、住民の中に定着させている
 - ・広報や、案内表示板等の充実により、住民の中に位置づいている
- ③失敗事例に共通するもの（A～Fについては、以下の項目が不十分である）
- ・エコミュージアムの推進本部等が設置されていない
 - ・エコミュージアムについて住民の理解が不足している
 - ・住民への広報、情報提供がされていない（各分野における学習と実践がない）
 - ・地域資源の発見に関する取組みが、不十分である
- これらは、活性化した事例では比較的充実しているものばかりである。

(3)表 4 の分析とまとめ

①住民の学習の視点が必要

システムづくり以外は、すべて「住民の学習の視点」が不十分であるということができる。「地域資源の発見」にしても、その基本的なものは「学習」の視点に集約されていることは、前のサテライトの部分で述べたとおりである。

これらの活動が、いずれも不十分なために、なかなか活性化しないという結果になっている。逆にこれらの活動、特に住民の「学習」「啓発」の部分を活活化することによって、エコミュージアムは活性化するというを示している。

②列挙した活動は、エコミュージアムにとって基本的な活動である

ここに列挙した活動は、どのように指導されてきたかが、エコミュージアムの維持、継続、発展にとってきわめて重要である。また、これらの果たしている部分は一般に、教育委員会、社会教育課が分担すべき領域である。しかしながら、エコミュージアムの推進部局と連携が取れていない

【3】基本計画

- ・基本計画に基づき、より具体性、実現性のある計画立案が不可欠（①コア施設、②施設計画、③管理運営施設、④サテライト、ディスカバリー・トレイル）

②の段階でエコミュージアム準備室を設置し、ニュースの発行、住民への啓発活動などを行う。

【4】基本設計

【5】実施設計

- ・基本設計で出された概算予算を調整して、詳細な設計を行う
- ・準備室では、事業活動のプログラムや、運営のための規則等の整備、運営上のマニュアルなどを作成する。

【6】建設工事

- ・建設工事は、コア施設、基幹となるアクセス道路、サテライト施設など必要な施設を建設する
- ・準備室では、パンフレットやポスターなど広報活動に努める

これらは、建設を前提に建設する側の計画であり、住民参

画の視点があまり加えられていないという傾向が強い¹³⁾。

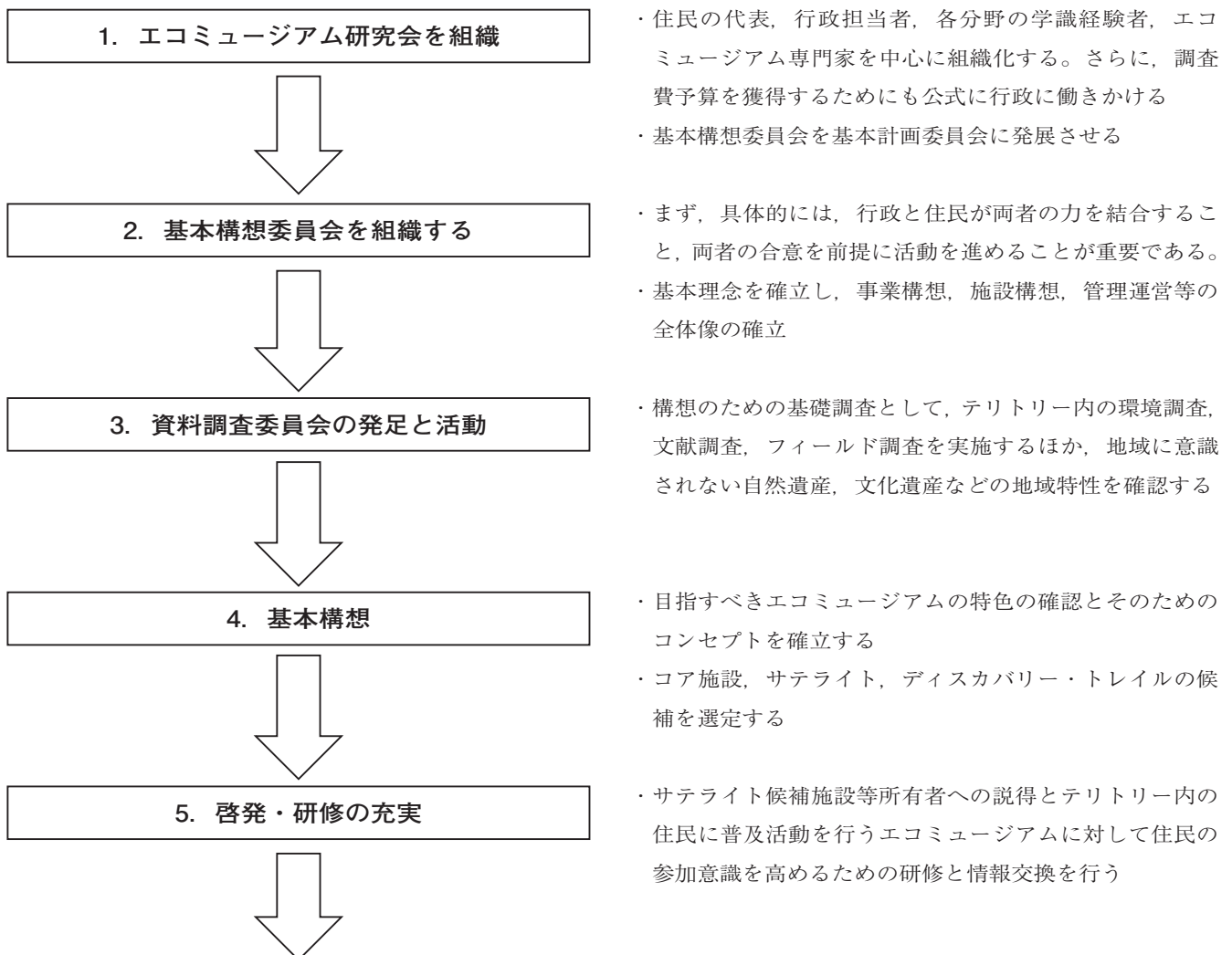
4. 計画の手順 まとめ

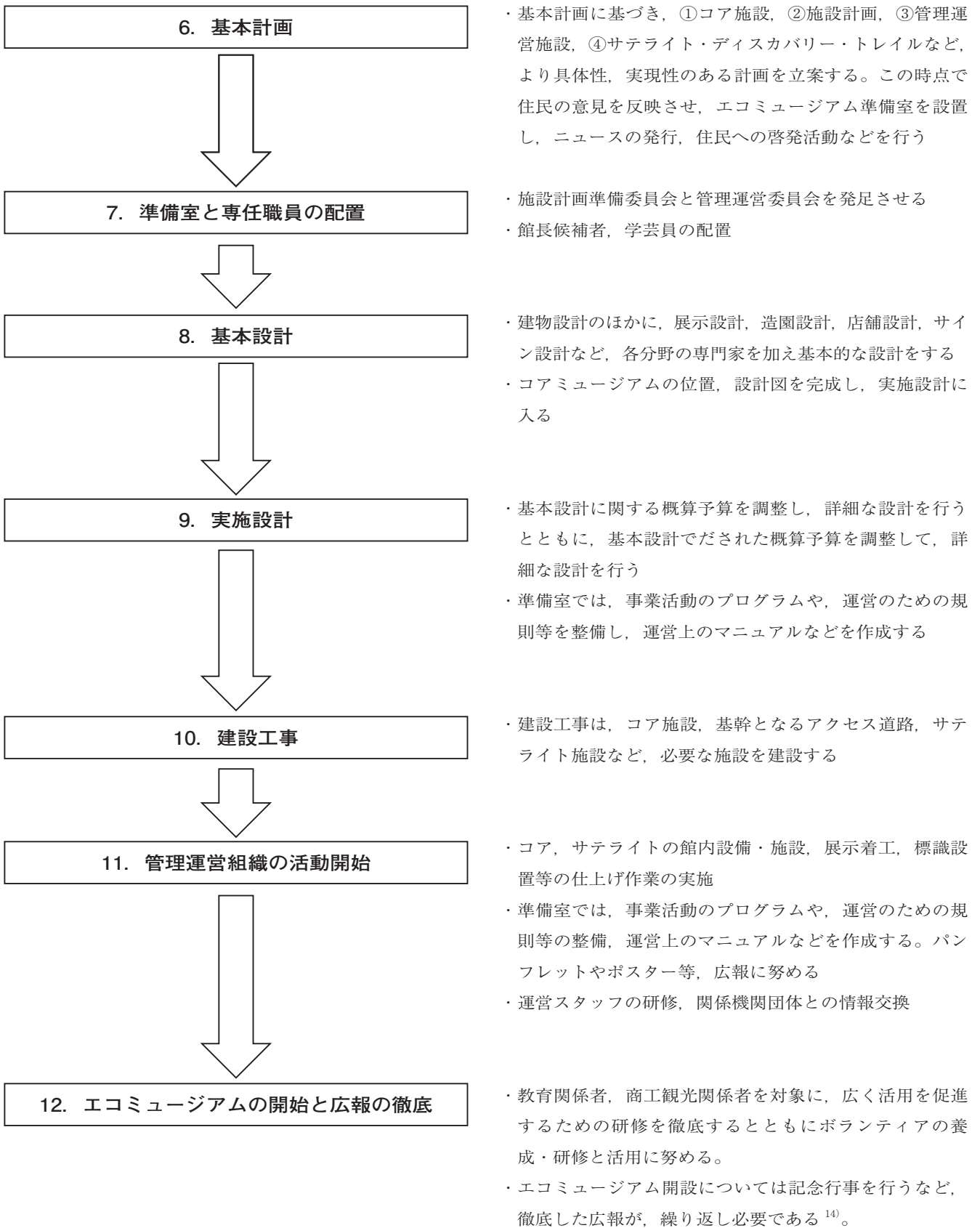
さて、既存の資料、指導してきた建設業者等の、エコミュージアムの構想から実現までの具体的な活動について検討してみた。これらを参考にすると、最低限取組むべき活動と、それに伴う優先順位があることを忘れてはならない。さらに必ずしも一つの手順だけを正確に追っても成功しないことも多いと思われる。中には、繰り返し実施すべきこともある。研修などは何度でも繰り返し実施することが必要である。

■エコミュージアムを開設するための基本的な手順

基本的には次のような手順により活動を進めることが効果的と思われる。エコミュージアムの設置や運営組織の構築までの手順に沿って以下に述べる。

13) 里見親幸 『ECOMUSEAM』 丹青総合研究所 1993年 pp.127～131





14)新井重三 『実践 エコミュージアム入門～21世紀のまちおこし』 牧野出版 1995年 pp.18～20

(2) 今後の課題

基本的にエコミュージアムを構想しながら結実しない場合があるのは、関係者の学習不足が原因である。首長はじめ行政の不理解、担当者の熱意、協力する民間の力など、どれか一つが欠落してもうまくいかない。その原因はエコミュージアムの開設の手がかりが見出しにくい点にあると考えられる。

本稿で述べた項目について最低限取組むことが成功の鍵となると思われる。今後、これらの項目については、実施する各自治体は、本稿で作成した手順（試案）を参照してみることをすすめたものである。その成果等を検討し実証することが必要である。